

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	岡本 哲雄
論文題目	ホモ・パティエンスの人間形成論 —フランクルの臨床哲学が歴史に応答したこと		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、「ホモ・パティエンス」という言葉の最初の提唱者であるヴィクトール・フランクルの思想研究である。その思想を介して、「ホモ・サピエンスの人間形成論」から「ホモ・パティエンスの人間形成論」への転換を試みる。</p> <p>前者 (ホモ・サピエンスの人間形成論) は、「未成熟状態からの脱出」(啓蒙) を目指し、目的合理主義の視野狭窄に陥った。パトス (受苦、情念、身体) との提携を切り、ロゴスを矮小化させ、人間形成の地盤を衰弱化させた。それに対して、後者 (ホモ・パティエンスの人間形成論) は、他者と共に受苦し、祈りながら行為し、応答し合い、相互に生成することを促す。</p> <p>全体を貫くキーワードは、《存在の謎 (エニグマ)》・《意味/受苦 (ロゴス/パトス)》・《教育の倫理 (エートス)》であり、その連関が、論文全体を通じて重層的・立体的に考察される。五部構成、序章と終章を含めて 14 章の内容は、以下のとおりである。</p> <p>第 I 部は、フランクルの臨床哲学における「人間生成」の問題を扱う。</p> <p>I - 1 章は、「ロゴセラピー＝実存分析」の臨床的な知を考察する。その知は、〈意味による生成〉を志向し、「日常性の透明化」を企て、その豊かさを自覚させようとする。《存在の謎》に開かれることによって《意味/受苦》を活性化させる「ロゴセラピー＝実存分析」は、心理療法の中でも特異な位置を占める。</p> <p>I - 2 章では、世界の「もとにある」という《存在の謎》(気がついた時には既に、理由を示されないまま、生まれてきた・生きているという謎) が、あらゆる人間の活動の根底にある。その謎から人間存在の「責任性」が根拠づけられ、《倫理》の存在論が確認される。</p> <p>I - 3 章では、フランクル臨床哲学の核心が《存在の謎》に開かれ、〈意味による生成〉による「日常の透明化」を目指したものであると整理される。〈意味による生成〉の内実が時間と永遠の関係によって把握され、「人間生成」は究極的に《存在の謎》と日常が浸透し合う場所で生じる現実であることが示される。</p> <p>第 II 部は、「ロゴセラピー＝実存分析」と「教育」の出会いを考察する。《教育の倫理》を模索するプロセスである。</p> <p>II - 1 章は、「意味喪失時代における教育の使命とは何か」という問いの検討である。フランクルの臨床知は大人の「教育の視点のコペルニクス的転回」をもたらす。この転回が、本論文の模索する《教育の倫理》の原型となる。</p> <p>II - 2 章は、ディーネルトの議論の検討である。フランクルの思想を展開したディーネルトは、教育を実存分析によって基礎づけることを説いたが、ホモ・パティエンスの視点は十分に自覚化されず、近代教育の硬直化した啓蒙性に回収される危惧があった。ホモ・パティエンスの視点への転回は、実は、フランクルの教育論でも、十分に表現されていなかったのである。</p> <p>第 III 部は、「〈意味 (ロゴス) による生成〉への奉仕 (セラペイア)」の検討である。</p> <p>III - 1 章は、〈意味〉の底に、自分がこの宇宙の中で〈誰〉なのかという《存在の謎》が隠れていることを示す。それが「聴くこと」へとひとを促し、これに応答することこそが、創造性の源であるとした。</p>			

Ⅲ - 2 章は、「〈意味（ロゴス）による生成〉への奉仕（セラペイア）」と規定したフランクフル臨床哲学を、狭い意味での心理療法から解放した。「ホモ・パティエンス」の語源 *pator* は、身体によって「世界」と交わり様々な影響を「被る（*leiden*）」という受動性である。最も深いところで「現存在は受苦である」という人間存在の真相を示した。

以上の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部が、フランクフル臨床哲学を再解釈する基礎編であったのに対して、以下、第Ⅳ・Ⅴ部は、その展開であり、他の諸思想との対話を試みる。

第Ⅳ部は、視点を「教育の意味」に転じる。

Ⅳ - 1 章は、「教育」の「見立て」について、例えば、教育を「物づくり」として、「植物栽培」として、「対話」として、「殺人」として、見立てる議論を、思想的に整理した。

Ⅳ - 2 章は、「ニヒリズムと教育」の関わりを探り、《教育の倫理》を考察した。教育の正当性をめぐる意味争奪の歴史は、「人間と教育」の究極の根拠が実は深い謎であることを示している。今日では、そうした構成主義を踏まえたうえで、複数主義の立場を堅持しながら相対主義の罨を回避する《教育の倫理》を模索せざるを得ない。また、「負い目」と「愛」、また「自己の証し」と「他者との約束」の狭間に《教育の倫理》をイメージし、「受苦」や「寄る辺なさ」といった、「力とは異なる方向」をもつ「意味（意味/受苦）」の摂取が、ニヒリズムを生きる《倫理》となる。

第Ⅴ部は、以上の視点を、練り直す仕方で、人間形成を語り直す。

Ⅴ - 1 章は、《存在の謎》への応答をめぐる精神史である。今日の間人中心主義に至る人類史的経緯と、その「非の潜勢力」としての不可知論的な「無への信仰」が暗示される。しかし 21 世紀の間人も「意味を奪われた剥き出しの生」と背中合わせである。そして、今日でも《存在の謎》を隠蔽することによって、野蛮さ・陳腐さが生じている。その典型、「近代的なものの生政治的範例」として、強制収容所が考察される。確かに〈アウシュヴィッツ〉は「帰ってこなかった人々」にしか証言できない。しかしフランクフルは「アウシュヴィッツにも拘らず詩があった」という。その物語が生まれる「ゼロ地点」を「視点のコペルニクスの転回」と重ねて考察した。

Ⅴ - 2 章では、「歴史のフィクション化・フィクションの歴史化」というリクールの議論を基礎に、「歴史というテキストの読み手」の責任を検討する。歴史の読み手は、「非在の絶対的他性に応答する」責任と、「自己を証しする」責任に目覚める必要がある。その〈意味〉実現は、根源的に被投的企投というパトス性を帯びた営みである。しかし、他者の苦悩を先回りして〈意味〉と結びつけるのでもない。レヴィナスなどの議論を起源とする歓待の思想との補完関係を見た。

Ⅴ - 3 章は、《謎》と「人間形成」の関係を考察した *Bildung* 論である。新人文主義的色彩を放つ *Bildung* 概念も、その淵源は「像なき」無なる神の完全な〈似像（*imago*, *Bild*）〉になるという神秘主義的思想である。フランクフルはこの系譜に属する。他方、レヴィナスに倣えば、超越から呼びかけを聴いてそれに応答する働きは、人間には内在しない。私たちは「過ぎ越した」「彼」の「痕跡」を解読することしかできない。つまり、一方に、自己の《存在の謎》に対して応答（自己超越）する運動があり（フランクフル）、他方に、眼前の他者への無限の《謎》めいた責任への応答として自己を捧げようとする運動がある（レヴィナス）。両者が人間形成の動性の中で重なり、補完し合う地点に、本論文の核心がある。

終章は、フランクフルが「歴史に応答した」ことを示した。フランクフルは、「神の死」の時代に「《意味/受苦》の牧草地」を耕し、それによって、ホモ・レリギオススを育てようとした。そして、野蛮化したホモ・エドゥカンドゥスを語り直し、人間形成論の焦点を「ニヒリズムを生き抜く《教育の倫理》」と示したことになる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「ホモ・パティエンス」という概念を最初に使い始めたヴィクトール・フランクルの思想を、現代思想との対話の中で、再構築した労作である。

「ホモ・パティエンス (受苦する人)」は、「ホモ・サピエンス (知の人)」から区別される。「ホモ・パティエンス」の語源「patior (苦しむ・我慢する・服従する)」は、身体によって世界と交わり、世界から影響を「被る (leiden)」受動性を意味する。本論文はこの「受動性・受苦性」を人間存在の真相と見る。そして、「受苦による生成に奉仕すること (セラペイア=セラピー)」を、フランクルの思想の中核に見る。

人間形成論としていえば、「ホモ・サピエンス」の人間形成論が「未成熟状態からの脱出 (啓蒙)」を目指し、目的合理主義の視野狭窄に陥ったのに対して、「ホモ・パティエンス」の人間形成論は、身体を備え、他者と共にある者同士が、共に苦しむ者として生成する姿を捉えようとする。

そこで、キーワードは、「存在の謎 (エニグマ)」、「意味/受苦 (ロゴス/パトス)」、「教育の倫理 (エートス)」となる。「存在の謎」には答えがない。答えのない底なしの問いと日常とが浸透し合う場所を、人間形成の現実と見る。

以上を骨子とした本論文の優れた点は、以下の三点である。

第一に、フランクルの思想を、心理療法として理解するだけではなく、意味喪失 (ニヒリズム) の時代に「意味」を問う思想として示した。この「意味」は、知の対象ではなく、「受苦」と結びついた「意味/受苦」である。本論文はその問いを教育の問いとつなぎ、「意味喪失時代における教育の使命とは何か」という問いに深めた。議論の進め方は極めて慎重で、全体の構成も緻密である。「セラピー」の思想と「教育」の思想をつなぐためには、いかに困難な議論を必要とするか。その実例をパフォーマンスに遂行してみせたことになる。

第二に、そうした意味の問いを「近代教育の啓蒙性」に回収せずに展開してみせた。フランクルの教育思想研究で知られるディーネルトは、教育を実存分析によって「基礎づけた」が、しかしホモ・パティエンスの視点が弱いため、教育と啓蒙を区別することができなかった。その陥穽を回避すべく、本論文は、問いそれ自体を周到に練り直すことから開始している。「相対主義を回避した複数主義」が一つの指針であり、「受苦」や「寄る辺なさ」といった「力とは異なる方向」がもう一つの指針である。

第三に、既成の価値基準 (宗教的語り) に回収されることなく、しかし相対主義にも陥ることなく、受苦する人間に内在する宗教性・超越性を示した。「神の死」の時代に提示された「ホモ・パティエンスとしてのホモ・レリギオス」である。むしろレヴィナスに倣えば、超越からの呼びかけに応答する働きは、人間の内にはない。まさにそうした批判と向き合いながら、しかし本論文はフランクルの立場を支持する。人間には、自己の「存在の謎」に応答する可能性があり、そのつど「自己の証し」を立てる可能性がある。フランクルとレヴィナスの視点が補完し合う「共同性」の地平が本論文の核心をなしている。

こうした意味において、本論文は、フランクルの思想の持っていた潜在的可能性 (時代への批判性) を、ポストモダンの思想を潜り抜けることによって、フランクル以上に、ラディカルに示すことに成功したことになる。

口頭試問においては極めて濃密な質疑応答が交わされた。例えば、1) ユング心理学から見る時、「意味」と「無意識」の関係はより複雑になる。フランクルの語る「無意識的精神性」をどう理解するか。2) フランクルの語る「逆説志向」と「脱反省」は CBT (認知行動療法) とどこで区別されるか。3) フランクルは歴史に応答した。ではこの博士論文も歴史に応答したのか。いかなる歴史的状況に応答したことになるのか。4) 本論文のフランクル理解はどこまで「京都学派」の影響を受けているの

か。

こうした問題は、すべて質疑応答の中で、申請者によって適切に応答されており、本論文の価値を貶めることにはならないことが、あらためて、確認された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年9月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降